

株式会社 日本電波ニュース社

Nihon Denpa News co.,ltd.

1960年3月に創業し、今年63年を迎えました。日本初の映像通信社として発足し、今も続く映像制作会社の老舗です。

ベトナム戦争をはじめ世界各地で起こった出来事を現場まで足を運びフィルムやビデオに映像として収め、テレビや映画を通じて日本や世界各国へ発信してきました。

インターネットが普及した今は、次なるステージへと進もうとしています。

誰のために何を伝えるのか日々考えながら、小さな会社ですが志を高く、人々のためになる情報を届けるため仕事に打ち込んでいます。



NHK World アジアインサイト より

<組織概要>

従業員数 26名（嘱託・現地雇用社員4名を含む）

組織： TV部（15名）

制作部（7名）

総務・経理・著作権事業（2名）

支局 ベトナム（1名） タイ（1名）※現地雇用

<応募資格>

新卒・既卒

<2024年度 募集人員、業種>

制作部 アシスタントディレクター ※将来ディレクター・プロデューサーを志す方

TV部 アシスタントディレクター ※将来ディレクターを志す方

いずれも若干名

<求める人材>

TV部：健康で明るく、何にでも興味をもって取り組む方。海外取材を厭わない方。

制作部：健康で明るく、国内の社会問題に興味のある方

就業時間 10:00~18:30 (業務により変動します) 休憩時間 1時間
休日 土日、祝日、夏休み3日、年末年始休暇 12/30~1/4
初任給 月給 215,700円 (月40時間分の固定残業代 52,201円を含む)
※月40時間を超える時間外労働をした場合、割増賃金を追加支給
昇給年1回、賞与実績(年3回)
手当 通勤手当、時間外手当
福利厚生 社会保険(健康保険、厚生年金、労災、雇用保険)、定期健診
60歳定年制(再雇用制度)退職金制度、業務PC購入補助、携帯端末貸与など
各種休暇制度(産前産後休暇・育児休暇、介護休暇、忌引など)有

試用期間 半年

※試用期間について

映像制作という世界に飛び込んできた新人の方が、映像制作という仕事を好きになって続けてゆけるのかどうか、考えるのに半年は必要というのが、私どものこれまでの経験に基づく実感です。

映像制作会社と言っても、多種多様です。制作している作品・番組のテーマ、得意とする取材地域、発表の仕方など、会社によって違います。当社の仕事が、皆さんが目指す道のりに沿っているのかどうか、しっかり見極めていただきたいと思っています。

また、当社は60歳定年制です。(その先、再雇用制度もあります。)人生の長い時間を働き続ける場として良いかどうか、しっかり考えて欲しいのです。半年間考えたその先に、映像制作を楽しく志をもってやっていこうという希望を持ってもらえたら、とても嬉しく思います。



<採用日程>

応募締切 2023年7月頃 (HPにて発表)

書類審査 7月中 結果発表

面接 7月~8月中 (一次、二次)

結果発表 8月末

審査の結果はいずれも、メールか電話にてお知らせします。

秋募集 2022年11月頃 ※欠員のある場合のみ

詳細はHP等にて発表

<仕事の紹介>

【TV部】制作した番組

- ・NHK 地上波 NHK スペシャル/ ETV 特集/クローズアップ現代
- ・NHK BS BS1 スペシャル / 釣りびと万歳 / ザ・ヒューマン
- ・NHK World Rising / Asia Insight / Side by Side / Direct Talk
- ・WOWOW ノンフィクション W
- ・フジテレビ NONFIX / ザ・ノンフィクション
- ・テレビ朝日 テレメンタリー
- ・TBS 年末 報道の日スペシャル
- ・映画「荒野に希望の灯をともし ～医師 中村哲 現地活動 35年の記録」(自主作品)
- ・映画「医師・中村哲 仕事・働くということ」(自主作品)



ほか多数

【制作部】制作したDVD・WEB動画

- ・民医連 WEB ニュース (全日本民主医療機関連合会)
- ・自由法曹団 100周年記念 DVD
- ・未来への決断～ノーモア原発～ (協力：原発をなくす全国連絡会)
- ・東京土建紹介 DVD (東京土建一般労働組合)
- ・日光木工 DVD (日光社寺文化財保存会)
- ・CRC 紹介動画「スポーツは世界を一つにする障害の壁を超える新たな挑戦」(トヨタ)
- ・「憲法と自衛隊」
- ・映画『原発故郷 3650日』(自主作品)
- ・映画『ちょっと北朝鮮まで行ってくるけん』(自主作品)



ほか多数



<先輩たちからのメッセージ>

入社2年 23歳 M.M (TV部 アシスタント ディレクター)



個性的な先輩が沢山いる個性的な会社です。一般企業では出会えない、個性的な人間に出会いたい人にはおススメな会社だと思います。

入社2年 23歳 I.Y (制作部 アシスタント ディレクター)



風通しがよく、若手であっても一社員として尊重してくれる会社です。制作部の仕事内容はTV部と比べてイメージしづらいかもかもしれませんが、自分の持ち味を生かしつつ社会や顧客のお手伝いができるところに面白さがあります。

入社3年 24歳 K.N (TV部 アシスタント ディレクター)



本当にいろいろ考えながら葛藤する1年でした。何事にも真摯に向き合っている先輩たちに刺激を受ける毎日です。たくさんの方に追われる日々ですが、いろいろな人と出会い、話を聞き、自分の知らなかった世界に出会うことができます。

入社3年 25歳 S.H (制作部 アシスタント ディレクター)



ドキュメンタリーに関心があり入社しました。制作側から作品に携わると、また新しい楽しみを見つけることができます。でもそれは、入社したばかりの人間の意見でも真剣に聞いてくれて、受け入れてもらえる社風があるからこその実感だと思っています。

入社7年 31歳 K.K (TV部ディレクター)



映像制作会社ということで「辞めちまえクズ!」「撮れるまで帰ってくるな!」と日々怒鳴られまくる事をイメージして入社しましたが、そんなことはありませんでした。自分の考えていることをじっくり聞いてくれる先輩も多いし、あまり怖い人もいません。

入社8年 32歳 F.S (TV部ディレクター)



旅行では行けないような僻地を訪れることができます。残業が多く、体力的に辛いこともありますが、放送を終えた時の達成感は抜群ですよ。



入社17年 40歳 T.M (制作部プロデューサー)



60年間、独立独歩で権力におもねらず歩んできた会社だけに、自由闊達な社風です。目的意識を持ってないとつらいかもしれません。言われたことだけをやっていくのではない、独自のテーマを見つけて追求したいという方、是非一緒に働きましょう!

入社16年 42歳 M.K (TV部ディレクター)



楽しくお金を稼ぎたい人にはおすすめしませんが、自分も知らなかった自分に出会えたりすることを、楽しいと思える人にはおすすめです。



入社17年目 45歳 S.M (TV部ディレクター)



ドキュメンタリーを撮ることで、人と出会い、世界と出会うことができます。



入社18年 48歳 E.R(TV部プロデューサー)



この仕事をしていると、つくづく世の中には知らないことばかりだなと気付かされます。取材相手からは、毎回、山盛りの刺激を受け、こちらものめり込んでしまうので、まあ本当にタフな仕事ですが、楽しくてやめられないですよ。ご応募お待ちしております！

入社24年 48歳 H.H (TV部プロデューサー)



子育てしながら働いています！

ATP賞 2018 ドキュメンタリー部門 優秀賞 受賞しました



入社30年 53歳 上田(TV部プロデューサー)



世界や日本国内で何が起きているのか、自分の目で確かめられる手ごたえのある仕事です。小さい会社ですが、ここからしか見えない景色があります。



<よくある質問>

Q：休みはとれますか？

A：週休2日です。取材や編集などのスケジュールによっては、土日で休みが取れない時もあります。その場合は、振替休日を取得できます。制作の終盤には休めない場合も多いので、完成後に振替休日をまとめて長期休暇とする人も多くいます。

Q：残業はありますか？

A：ある時にはそれなりにあります。月によっては無い場合もあります。既に給与に見なし残業の40時間が含まれていますが、それは残業が無い月にも支給されます。編集作業などに追われ、残業が40時

間を超える月もあります。その場合は、別途時間外手当が出ます。なるべく残業のない働き方を目指し、働き方改革をすすめています。

Q：産休・育休は取れますか？

A：取れます。ここ20年で出産経験者は3人ですが、全員取得しています。現在も子育て中の社員が半数程度います。出勤退勤時間も保育園の送り迎えや、子どもの成長に合わせ、皆で助け合いフレキシブルに対応しています。保護者会や学校行事などにも積極的に出席することをすすめています。そうした生活実感は仕事にも生かされると思っています。

Q：時短勤務・リモートワークはできますか？

A：できます。直属の上司に理由を説明し、許可を得て行います。その日の作業予定をオンラインホワイトボードに朝までに記入し、作業終了後に実施状況を勤怠表に記入するという方法で業務内容の管理・情報共有をしています。

子どもを抱える社員は、日常的にリモートワークを利用しています。



Q：制作部とテレビ部の違いはなんですか？

A：テレビ部は映像コンテンツの主な発表メディアがテレビです。制作部は、クライアントの要望に合わせてネット配信サービス、DVD、自主サーバーによるWEBメディア、映画など多様です。詳しくはHPの「事業内容」をご覧ください。

Q：戦場取材に行かねばなりませんか？

A：砲弾が行き交う戦場に無理に行かせることはありません。

戦場だから伝えるべき何かがあるのではありません。どんな情報が人々の役に立つのか、それが第一命題です。日々の生活や身近な出来事の中から、伝えるべきことを掘り起こす視点こそ大切だと考えています。

Q：戦場取材に行きたいのですが、行けますか？

A：簡単には行けません。創業以来、無差別空爆のさ中の戦場へ取材ために赴いたのはベトナム戦争だけです。当時、加害的立場で戦争に加担する日本の状況に照らし、その実情を日本人として知るべき大義がありました。大義なき命がけの取材、興味本位の取材には、許可は出ません。

一方で、一般的に危険と思われる場所であっても、プロの知見から安全が確保でき、行くべき理由があれば、それは取材するディレクターやカメラマンの意志と大義に照らして、GOと判断する場合もあります。

<ご挨拶>



石垣巳佐夫 顧問

日本電波ニュース社に関心を持っていただきありがとうございます。ご挨拶です。

創立が1960年3月ですから、60年余の歴史をきざんできました。創立者の柳澤恭雄は、東西冷戦のただ中であつた創立当初を回想しこう綴っています。「外国から入ってくるニュースは特にテレビの場合、いわゆる西側だけのニュースで、東側、社会主義のものがない、これでは片目しかあいていない状態だから補完したいということであつた。ニュースには客観性とともにも国民性、ナショナリティがある。日本人の記者が取材した外国のニュースが必要だということだ、近いうちに日本のテレビ局も記者を外国にだすだろう。それまでを、私のところでつなげればいい。あとは脇役でいい。そう思っていた・・・。」

資本金100万円を銀行から借り、日本初の映像通信社として仕事を開始した当社は、NHK、民放TV各局、さらにはアメリカの3大TVネットワーク、フランス、ドイツなど各国TV局との契約へとその配信先は世界へと広がっていきました。

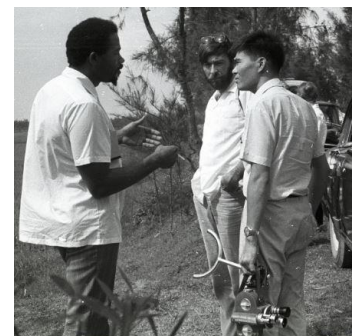
そんな中で起きたベトナム戦争では、北ベトナムを中心にアメリカが無差別空爆を続ける下で、人々がどう生きているのかを取材、世界へ配信し、その映像がインドシナ戦争報道で重要な役割を果たすことになりました。

国内ではいち早く、公害病や薬害エイズ事件、塵肺被害などを取材し発信しました。今も民主団体や労働組合の要望に応え、人々の暮らしに根差したテーマを取材し続けています。これは当社の理念が社会に受け入れられていることの証であると思います。

「脇役でよい」とはじまった会社ですが、世に送りだした映像の中には、世界から注目を集めたものがいくつもありました。創立者柳澤はこうも語っています「小さい会社でも、大きな仕事はできる」創立から一貫した制作スタンスは、今後も継承され発展していくことでしょう。



創業者・柳澤恭雄（右端）と
越ホーチミン大統領（1962）



ベトナム戦争中、現地取材をする
石垣カメラマン（当時）

<会社沿革>

- 1960年 日本初のテレビニュース通信会社として中央区京橋に設立。
テレビ局に海外ニュースの配信を開始。
- 1961年 日本初の中国紹介番組、NTV特番「新中国に行く」放映。
- 1964年 本社を港区赤坂（溜池）に移転。北京支局、ハノイ支局開設
- 1965年 ベトナムでのアメリカ軍の北爆報道で内外の注目を集める。
- 1968年 プノンペン支局開設。
- 1969年 プラハ支局開設。映画「ベトナム」完成。120万人を動員。
- 1972年 ベトナム戦争報道を世界のテレビ局に配信。
- 1977年 映画「トンニャット（統一）ベトナム」完成
- 1979年 プノンペン解放を西側テレビとしてはじめて取材。
- 1980年 ビデオでのニュース配信開始。各局TV局での放送に向け番組制作活発化。
- 1985年 アフリカ飢餓取材、日本テレビ「24時間テレビ」などで放送。
- 1987年 広告代理業務を行なう関連会社「メディア21」を設立。
- 1990年 旧ソ連ゴルバチョフ大統領単体会見。
- 1991年 湾岸戦争取材、報道。
- 1992年 カンボジアUNTAC派遣報道。
- 1994年 ザイール・ゴマに臨時支局を置いて、ルワンダ内戦を取材。
- 1995年 阪神大震災で臨時支局、数々の特集を制作。
本社を港区六本木に移転。
- 1998年 北朝鮮報道活発化、テレビ朝日を中心に特集放送。
- 2002年 アフガニスタン戦争報道。
- 2003年 イラク戦争取材、報道。クルド自治区やサマワ市に取材班
を派遣。
- 2007年 本社を港区麻布十番に移転
- 2011年 東日本大震災を取材、TV番組制作、WEB動画で配信
- 2016年 NDN-TV (You tube) 開設
- 2020年 臨時山梨支局、臨時フランス支局を設置、コロナ禍の国内外を取材
- 2021年 NDN-TV (You tube) 登録者数3000人達成



ゴルバチョフ 旧ソ連大統領
単体会見（1990）

<主な受賞歴>



- 2022年 第31回 日本映画撮影監督協会賞
劇場版「荒野に希望の灯をともし ～医師 中村哲 35年の軌跡～」
- 2021年 ギャラクシー賞 TV部門特別賞
「22年間にわたるパキスタン・アフガニスタンにおける中村哲医師の取材に対し」
NHK BS1 スペシャル「良心を束ねて河となす～医師・中村哲 73年の軌跡～」
ATP グランプリ 総務大臣賞
NHK スペシャル「浅草、遠い春を待ちながら～下町経営者と信用金庫～」
ギャラクシー賞 TV部門 優秀賞
NHK 総合特集「中村哲の声がきこえる」ギャラクシー賞 選奨、ATP 新人奨励賞
- 2020年 NHK BS1 スペシャル「バレエの王子になる！“世界最高峰”ロシア・バレエ学校の青春」
ニューヨーク・フェスティバル銅賞
アメリカ国際フィルム・ビデオ祭 ドキュメンタリー芸術部門 銀賞
- 2019年 NHK ETV 特集「武器ではなく 命の水を」（再放送）放送人の会グランプリ準グランプリ
NHK BS1 スペシャル「バレエの王子になる！“世界最高峰”ロシア・バレエ学校の青春」
ギャラクシー賞 選奨
- 2018年 WOWOW ノンフィクション W
「ユーリー・ノルシュテインの、話の話。
～アニメーションの神様 終わらない挑戦～」
ATP 賞ドキュメンタリー部門 優秀賞
- 2017年 NHK ETV 特集「武器ではなく 命の水を」
ATP 賞ドキュメンタリー部門 優秀賞
- 2016年 NHK 「グレートレース 大草原を疾走せよ～モンゴル 900km～後編」
アジアテレビ賞 ベストスポーツ番組 奨励賞
朝日放送「語られなかった英雄たち～ベトナム戦争 40年目の真実～」



- ニューヨーク祭 入賞
- 2016年 NHK-World「Vietnam War～Searching for Young Man～」
アメリカ国際フィルムビデオ祭 歴史ドキュメンタリー ゴールドカメラ賞
- 2015年 映画「アフガン 干ばつの大地に用水路を拓く 治水技術7年の記録」日本映画復興奨励賞
- 2013年 NHK「それでもジャーナリストは戦場に立つ」ATPドキュメンタリー部門優秀賞
NHKBSプレミアム「旅のチカラ・失われた故郷の記憶を求めて」ATP新人賞
- 2011年 映画「アフガンに命の水を」
土木学科映画コンクール 最優秀賞
- 2006年 テレビ朝日・サンデープロジェクト
「シリーズ言論は大丈夫か～共謀罪～」JCJ賞
- 2005年 NHK ETV 特集
「戦乱と干ばつの大地から
～医師・中村哲 アフガニスタンの20年～」
ギャラクシー賞・奨励賞、ATPドキュメンタリー部門優秀賞
- 2003年 CX・ザ・ノンフィクション「森を追われた動物たち」
ATPドキュメンタリー部門優秀賞
- 2002年 NHKハイビジョンスペシャル「氷上のふたり～ロシア愛と挑戦の物語」
ATPドキュメンタリー部門優秀賞
- 2001年 ビデオ「屋根を葺く技術～檜皮葺・柿葺」日本紹介映画コンクール優秀賞
- 2001年 BS-i「封印された旋律～ガス室に消えた音楽家たち～」国際ハイビジョン映画祭入賞
- 2000年 NHKBS特集「ネパール母の家」I賞、ATPドキュメンタリー部門優秀賞
- 1998年 NHK祝日特集「ヒマラヤ縦断・塩の隊商が行く」郵政大臣賞受賞、ATP教養部門最優秀賞
- 1998年 テレビ朝日・サンデープロジェクト「スーパーKを追え～北朝鮮偽札事件」ギャラクシー奨励賞
- 1995年 映画「遙かなる流れの郷～岩手県胆沢村」
シカゴ国際映画祭ドキュメンタリー部門ゴールドプラグ賞
- 1995年 ハイビジョン映画「神々の棲む里～長野県南信濃村」
ヒューストン国際映画祭文化芸術部門グランプリ
- 1991年 NTV特番「よみがえる仁王像」文化庁芸術作品賞
- 1988年 映画「ドキュメント三宅島」映画復興会議奨励賞
- 1988年 映画「嵐～産業空洞化との闘い」映画復興会議奨励賞
- 1986年 テレビ朝日「車椅子のおてんば娘」民間放送連盟優秀賞
- 1982年 映画「りんごの樹は育つ～沖電気争議団の記録」映画復興会議奨励賞
- 1981年 中京テレビ放送「さまよえる難民」文化庁芸術祭優秀賞
- 1979年 映画「ほうりだされてなるものか」ライブチヒ映画祭奨励賞
- 1973年 「ベトナム・インドシナ一連の報道」JCJ奨励賞
- 1972年 映画「ニクソン・ノー」ライブチヒ映画祭名誉賞
- 1969年 映画「ベトナム」ライブチヒ映画祭銀鳩賞、キネマ旬報ベストテン

